

1

***「神話」とは何か？神話から何が分かるのか？**

「神話」…集団や社会によって神聖視される物語。人々によって「真実」を語っているものと信じられる。そのため、人々にとって作者や成立年代は問題にならない。

「建国神話」…国家の起源についての神話。自然と人間との関係を核とし、しばしば支配の正統性の根拠とされる。（例：「日本書紀」「古事記」）

※神話/建国神話の働き

…社会をまとめるための共通原理/支配の正統性を与える

…その国と周辺世界との関係を説明する

※神話の分析（神話学）

**= 国家のあり方、国家と国家の関係、人間と自然の関係などについての人々の考え方を
知るための方法の一つ（⇔真実性の検証）**

2

2

* 東南アジアの建国神話の特徴

・ 熱帯気候、豊かな森林、交通路としての海や河川の重要性
→ 人間と動植物・海・川との関係についての話が多い

・ 周囲の大帝国の存在(インド・中国・ペルシアなど)、多様な人々の往来
→ 様々な「他者」との関係に関する話が多い

※ 東南アジアの建国神話の重要なテーマ

…① 自然を統治すること(人と自然を仲介すること)

…② 諸勢力とのバランス関係を保つこと(国の内部と外部を仲介すること)

※ 3つの国家の建国神話…パサイ王国、マラッカ王国、マタラム王国

3

3

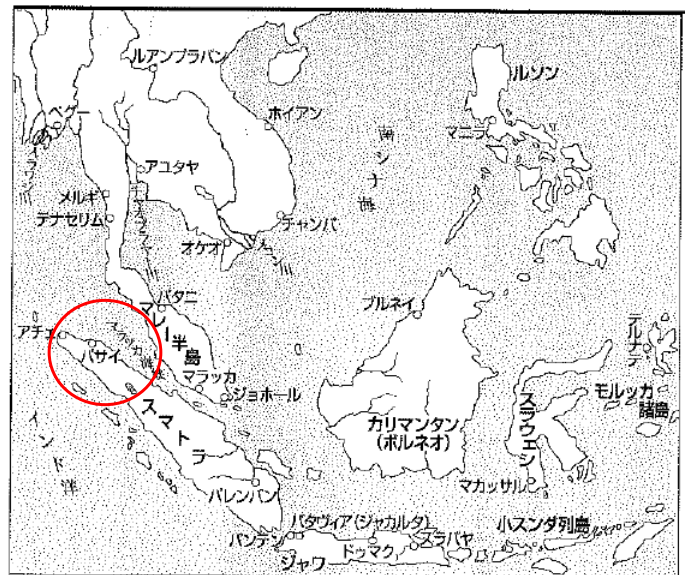
① パサイ王国の建国神話：『パサイ王国物語』

* パサイ(サムドラ)王国(13世紀末～)

・ 北スマトラの港市国家、14～15世紀に竜脳や金、胡椒の輸出で繁栄した

・ インドや西アジアの商人、13世紀以降は特にムスリム商人が頻繁に来航する

・ 「サムドラ」→転じて「スマトラ」となり、のちに島全体を指す



弘末雅士(2003)『東南アジアの建国神話』山川出版社, p.8

4

4

＊『パサイ王国物語』のあらすじ

・昔、北スマトラのスムランガの地に、ラジャ・ムハンマドとラジャ・アフマッドの王族の兄弟がいた。ある日ラジャ・ムハンマドは、家臣たちを引き連れて森を切り開きに出かけた。すると森の中に大きくて黄金色に輝く竹を発見した。その竹は家臣たちが切っても切ってもまたすぐに伸びてくる不思議な竹であった。ラジャ・ムハンマドがその竹を切り取ったところ、竹株の真ん中に大きな竹の子があり、そこから可愛い女の子が出てきた。

・ラジャ・ムハンマドは、その子を家に連れて帰り、①「竹姫」と名付けて大事に育てた。「竹姫」は成長し、日に日に可愛さを増していった。

5

5

・一方、ラジャ・ムハンマドが「竹姫」を手に入れたことを知った兄弟ラジャ・アフマッドも、狩りをしに森へ出かけた。すると森の奥で彼は、修行中の一人の老人に出会った。その老人がただならぬ人であることを感じたラジャ・アフマッドは、ラジャ・ムハンマドのように自分も子どもを得たいことを伝えた。すると老人は、象に育てられている男の子がいることを話した。

・ラジャ・アフマッドが待っていると、そこに大きな象が頭に男の子を載せて水浴びにやってきた。ラジャ・アフマッドはいったん家に帰った後、家来たちと共に再び森に来て、象が水浴びをしている隙に男の子を奪った。その子は見目麗しく、①メガ・ラジャ(象に育てられた王)と命名された。

・①成長したメガラジャは「竹姫」と結婚し、その間に、後にパサイの初代王となるメラ・シルが生まれた。

6

6

・メラ・シルは成長すると、②その力を活かして環虫を茹でて金にしたり、野生の水牛をたくさん捕らえて飼いならしたりして、大変豊かになった。そのため、彼の評判を妬む弟のメラ・ハスムと不和になり、住むべき地を求めてパサガン川上流の内陸地を訪れた。彼はその地の人々に迎え入れられ、闘鶏をして時を過ごした。

・③彼は負けると賭けたものを支払ったが、勝っても決して相手に金品を要求せず、やってきた相手に水牛を与えた。メラ・シルの気前の良さと豊かさを評価して、人々は彼を自分たちの王とすることに決めた。メラ・シルはその地をサムドラと命名した。

7

7

※パサイ王国の建国神話は何を表しているのか？

①竹から生まれた女の子と、象に育てられた男の子が結婚し、後の王メラ・シルが生まれた

→王は森林世界の植物の力と動物の力を併せもつことを示す

②メラ・シルは環虫を茹でて金にしたり、野生の水牛をたくさん捕らえて飼いならしたりすることができた

→王は自然の世界を司ることができることを示す

③メラ・シルは気前がよくて豊かであり、人々に王として選ばれた

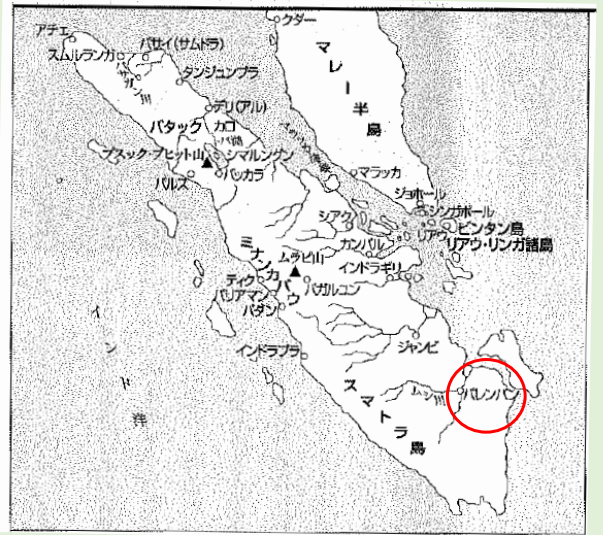
→王国の正統性を示す

8

8

・③成長した3人の息子は、海中から南スマトラのムシ川河口の町パレンバンの聖地ブキット・シグンタンに降臨した。3人が降臨したとき、その丘の頂上は黄金となり、稲穂は金粒となり、稲の葉は銀に、茎は金銅の合金になった。

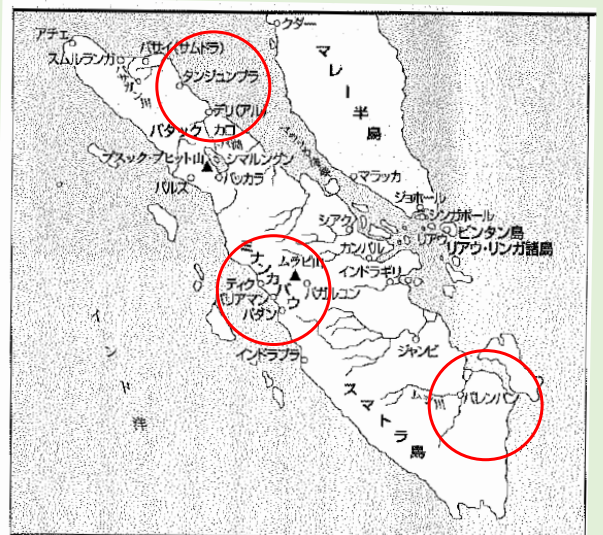
・③パレンバンの首長ドゥマン・レバル・ダウンは、アレクサンダー大王の子孫を称する3人の降臨者を迎え入れた。



11

・やがて噂を聞きつけた周辺各地から、人々が3人を表敬訪問に来た。その際、④3人のうち長男は中部スマトラのミナンカバウの王に、次男は北スマトラのマラッカ海峡岸の港市タンジュンプラの王に迎えられた。

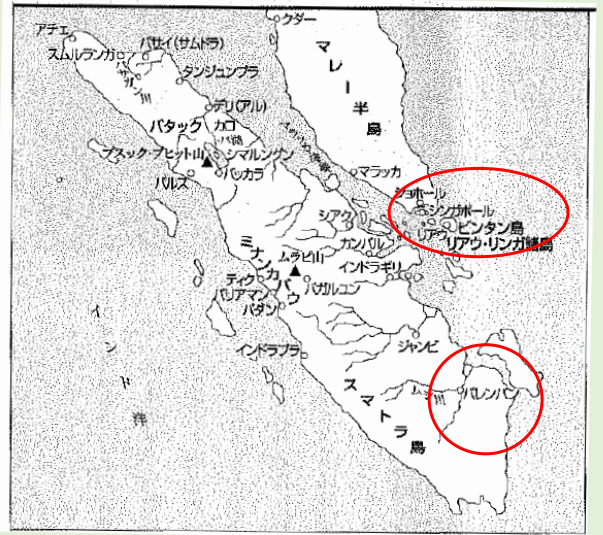
・④三男はドゥマン・レバル・ダウンによりパレンバンの王に迎えられ、スリ・トリ・ブアナ(「三界の王」：水界・地上界・天上界)と称した。



12

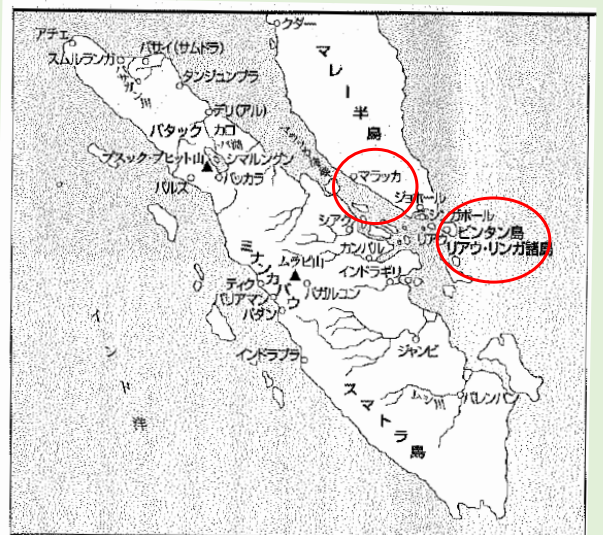
・スリ・トリ・ブアナはやがて海辺に街を作りたいとドゥマン・レバル・ダウンに打ち明けた。ドゥマン・レバル・ダウンは協力を約束し、スリ・トリ・ブアナと共に海峡を渡り、ビンタン島に赴いた。②ビンタン島を支配していた女王は、スリ・トリ・ブアナを養子として迎え入れた。

・その後、ビンタン島の女王の支援を得て、スリ・トリ・ブアナはさらに海峡を渡り、シンガポールに向かった。②海は嵐が起きて荒れていたが、海の王の孫であるスリ・トリ・ブアナは荒ぶる海を静め、無事にシンガポールに上陸し、その地に町を作った。



13

・その後、スリ・トリ・ブアナの子孫の時代に東ジャワのヒンドゥー教王国マジャパヒトから執拗な攻撃を受けたため、スリ・トリ・ブアナの曾孫で第2代国王のスルタン・イスカンドル・シャーがマラッカの地に移り、マラッカ王国を建国した。



14

※マラッカ王国の建国神話は何を表しているのか？

①マラッカ王国の建国者スリ・トリ・ブアナ(=史料ではパラメスワラ)は、アレクサンダー大王の子孫であるラジャ・チュラン(インドのチョーラ王)と、海の王の娘との間に生まれた子どもの子孫である

<背景>

- ・西方イスラーム世界は重要な交易相手であった
- ・アレクサンダー大王はアラブやペルシアでイスラームの英雄として知られる

→大王との関係を示すことで、貿易を有利にする

=【西方イスラーム世界との友好関係】

15

15

②スリ・トリ・ブアナは海の王の子孫であり、ビンタン島の女王(=マラッカ海峡を支配する女王)の養子となって荒ぶる海を静めた。

<背景>

- ・マラッカ王国は海上交易国家として栄えた国であった
(=「海のマンダラ」国家)

→マラッカ王国は海と特別な関係を持ち、海を制する国家であることを示すことで、国家として正統性をもつ

=【海の民との友好関係】

16

16

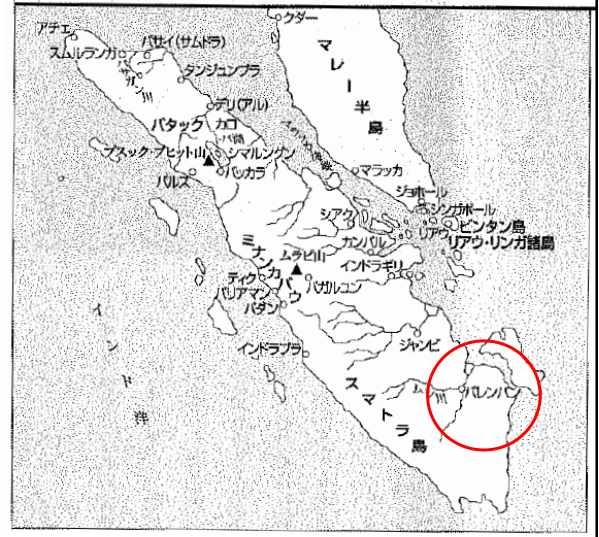
③スリ・トリ・ブアナを含むラジャ・チュランと海の王の娘の3人の息子は、スマトラ島の要衝パレンバンの聖地ブキット・シグンタンに降臨した。

<背景>

・3人が降臨したパレンバンは、古代の仏教国シュリーヴィジャヤのかつての中心地。ブキット・シグンタン(=「丘」)はその聖地で、人々からは宇宙の中心にあるメール山として信仰されていた。

→マラッカ王国はシュリーヴィジャヤ王国とゆかりがあることを示す

=【シュリーヴィジャヤ王国の後継者としての正統性】



17

④3人の息子のうち、長男は中部スマトラのミナンカバウの王に、次男は北スマトラのマラッカ海峡岸の港市タンジュンプラの王に、三男はパレンバンの王として迎えられた。

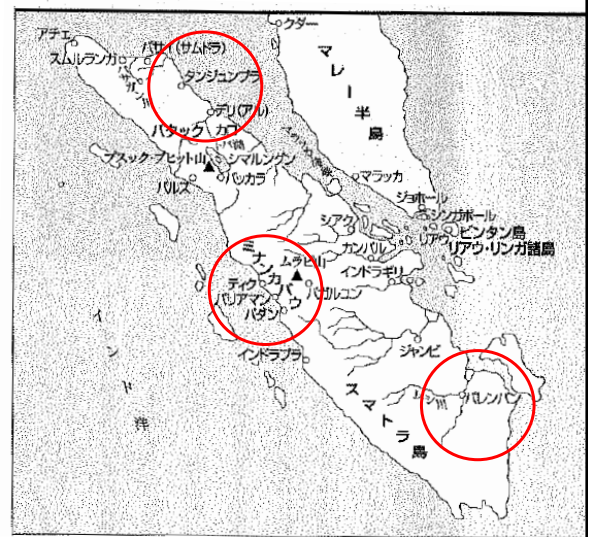
<背景>

・ミナンカバウは金や森林生産物の主要産地、タンジュンプラはミナンカバウやその他の内陸部と密接な関係をもつアル王国の港であった

・またパレンバンは、スマトラとジャワの産品を集荷して繁栄していた港でもあった

→スマトラ島の主要な産地や港に迎え入れられ、良好な関係をもつことを示す

=【内陸部の輸出品生産地との友好関係】



18

* 『ムラユ王統記』 のつづき

・スリ・トリ・ブアナ曾孫である第2代国王のスルタン・イスカンダル・シャーは、北スマトラのパサイ王国との交流によりイスラームに改宗したが、その息子スリ・マハラジャは非ムスリムであった。シンガポールからマラッカに移ったことによって、マジャパヒト王国の勢力圏から離れたマラッカ王家は、さらにその次の王で、イスカンダル・シャーの孫にあたるラジャ・トゥンガの代にこそってイスラームに改宗した。

・すなわち、⑤ラジャ・トゥンガはある夜、夢で預言者ムハンマドと出会い、ムハンマドから「アッラーのほかには神はなし、ムハンマドは神の使徒である」と唱えるよう命じられた。さらに次の日にジェッタ(サウジアラビア西部の都市)から船がやってくるので、その船からマラッカに上陸するある人物の言うことに従うよう指示された。ラジャ・トゥンガが同意すると、ムハンマドは消え去った。

19

19

* 『ムラユ王統記』 のつづき

・目覚めると、ラジャ・トゥンガはすでに割礼されており、夢の中でムハンマドから教わった信仰告白(「アッラーのほかには神はなし、ムハンマドは神の使徒である」)をひとりで唱えられるようになっていた。翌日、ムハンマドのお告げ通りジェッタより船が来航した。④船から降りたサイード・アブドゥル・アジズの導きにより、ラジャ・トゥンガは改宗し、スルタン・ムハンマド・シャーと名乗るようになった。以降、マラッカの存在は、西アジアのイスラーム世界に広く知られるようになった。

・その後、⑥スルタン・ムハンマド・シャーの3代後のスルタン・マンスール・シャーは、中国の王女を嫁に迎えた。また彼の時代、中国の皇帝は、スルタン・マンスール・シャーの足を浄める水を贈られ、それを飲むと病気が治った。このことにより、マラッカ王と中国皇帝との関係はいっそう親密になった。

20

20

※マラッカ王国の建国神話は何を表しているのか？

⑤ラジャ・トゥンガは、夢の中で預言者ムハンマドのお告げを受け、イスラームへ改宗した

<背景>

- ・西方イスラーム世界は重要な交易相手であった

(←アレクサンダー大王のエピソード)

- ・しかしマラッカ王国の建国神話は、仏教やマラッカ海峡周辺の地元の信仰との関係を重視するものであったため、やはりイスラーム世界との間に溝があった

→ラジャ・トゥンガ(=史料では実在しない人物)の改宗のエピソードを付け加えることにより、イスラームとの親密性をより強く示した

= 【イスラームとの友好関係】

21

21

⑥スルタン・マンスール・シャーは、中国の王女を嫁に迎えた。中国の皇帝はスルトンの聖なる水を飲み病気が治った

<背景>

- ・建国当初より、マラッカ王国は北方のシャム(アユタヤ)の南進に悩まされていた

- ・マラッカ国王はシャムに対抗するために中国へ接近し、15世紀前半の鄭和の遠征を契機に中国(明朝)と朝貢関係に入った

→マラッカ王国が中国の皇帝の庇護下にあることを示す

= 【中国との友好関係】

22

22

* 『ジャワ国縁起』のあらすじ

・^①人類の始まりはアダムであり、アダムの孫の一人アンワスは、メッカに居を構えてイスラームを信奉した。それに対して^②もう一人の孫のヌルチャハヤは悪魔サタンに導かれて異教の道に入り、インド人やジャワ人の祖先となった。インドのパーンダワ族の末裔の一人ジョヨボヨが東ジャワのクディリに都を移し、ジャワの歴史が始まった。

・東ジャワを中心にいくつかの王国が興隆した後、歴史の舞台は西ジャワのパジャジャラン王国へ移った。パジャジャラン王国では、パムカス王の時代に、王の長男によって王位が奪われたため、次男ススルは東に逃れてヒンドゥー王国であるマジャパヒト王国を建国した。

・その後、マジャパヒト王国はイスラーム勢力によって滅ぼされたが、王の子孫たちはイスラーム教へ改宗して生き延びた。^③その子孫の一人のパマナハンは、アダムの孫の一人アンワスの子孫にあたる女性と結婚し、息子をもうけた。この息子が、マタラム王国初代の国王のスナパティである。

25

25

※マタラム王国の建国神話は何を表しているのか？

①人類の始まりはアダムであり、アダムの孫の一人アンワスはイスラームを信奉した。

→マタラム王国が、イスラームの預言者たちの系譜につながっていることを示す

②もう一人の孫のヌルチャハヤは悪魔サタンに導かれて異教の道に入り、インド人やジャワ人の祖先となった。

→マタラム王国が、インドとジャワの支配者の系譜につながっていることを示す

③ヌルチャハヤの子孫(パマナハン/ジャワの支配者)がアンスワの子孫(イスラーム教徒)と結婚し、その息子がマタラム王国の王となった

→マタラム王国は、インド・ジャワの系譜とイスラームの系譜の両方につながっていることを示す

26

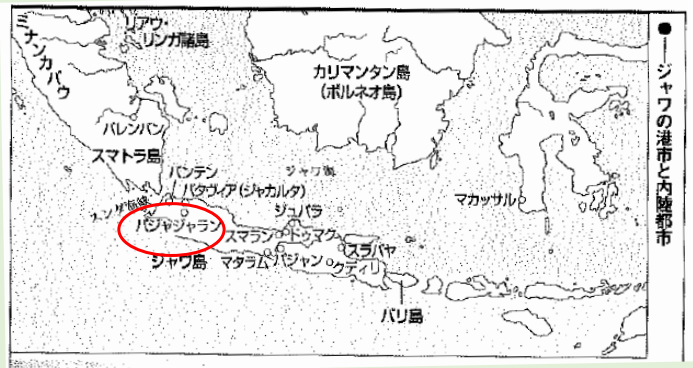
26

※『ジャワ国縁起』のつづき※

・パジャジャラン王国のパムカス王の次男スルが東に逃れてマジャパヒト王国を建国した後、⑤パジャジャラン王女のタヌラガは、スペインからやって来たスクムルと結婚した。2人の間に生まれた息子ジャンクンは、後にジャカルタの地の王となった。総督ヤン・ピーテルスゾーン・クーンこそ、その人である。

※『スラト・サコンダル』における記述

...18世紀後半から19世紀初めにジョグジャカルタのスルタン王家により作成された



27

※マタラム王国の建国神話は何を表しているのか？

⑤オランダ総督ヤン・ピーテルスゾーン・クーンは、パジャジャラン王国の女王とスペイン人の息子ジャンクンである。

<背景>

- ・オランダ東インド会社の第4・6代総督となったヤン・ピーテルスゾーン・クーンは、1619年に要塞都市バタヴィア(現在のジャカルタ)を築いて会社のアジア貿易拠点とした
- ・マタラム王国はオランダの介入を受けて分割され、18世紀半ばには実質的な支配権をオランダに割譲した

→オランダ人支配者クーンとマタラム王家の間に血縁関係があることを示す

= 【オランダ人との友好関係】 (オランダ人に支配される屈辱感を和らげる?)

28

28

まとめ：建国神話から分かること/建国神話の重要なテーマ

・社会をまとめるための支配の正統性

…土着の人々からの歓迎、聖なる山や丘とのつながり、預言者ムハンマドのお告げ

・自然や天然資源の統治

…植物・動物・山・海とつながりをもつ出自、自然を司る力(野牛の飼育、金の稲穂)

・外部の勢力とのバランス関係

…海の民・内陸部の輸出品生産地・西方イスラーム世界・中国・ヨーロッパ人との友好/血縁関係

→それぞれの国家が何を重視し、外部の世界と実際にどのような関係をもっていたのかを知る手がかりとしての神話（⇔神話の真実性）

→神話の比較研究の可能性（地域的な特徴⇔人間に共通の深層心理？）

29

29

参考文献

- 大森太良編『日本神話の比較研究』法政大学出版局,1974
- 大森太良『神話学入門』筑摩書房,2019
- 鶴見良行『マラッカ物語』時事通信社, 1981
- 弘末雅士『東南アジアの建国神話』山川出版社, 2003

30

30